



知っておきたい 身の回りのマークのいろいろ

これまで紹介してきた「非常口」などのマークや記号は「ピクトグラム (Pictogram)」とも呼ばれ、日本国内におけるその普及のきっかけは1964年に開催された東京オリンピックにありました。今月も先月に続き、オリンピックにちなんだマークの話題を紹介します。

重光 純 Shigemitsu Jun

ライター・エディター。省庁発行の広報誌の編集に長年携わる。

街を歩くと、「エスカレーター」「改札口」「トイレ」など、文字の代わりにピクトグラムがたくさん使われているのを目にします。ピクトグラムとは「視覚言語」の1つで、「絵文字」「絵で表す言葉」「図記号」とも呼ばれています。今でこそ、駅や大規模な商業・公共施設など、街の至るところに普及していますが、半世紀前の日本には、そのような表示方法はほとんどありませんでした。

東京オリンピックがきっかけ

日本でピクトグラムが広く普及したきっかけは、1964年に東京で開かれた第18回夏季オリンピックでした。当時の日本は戦後復興がようやく軌道に乗り、高度経済成長の真っただ中にありました。海外旅行もまだ珍しい時代、日本にやってくる外国人も多くはありませんでした(ちなみに法務局出入国管理統計によれば、2012年の外国人の日本への入国者数は917万2146人ですが、1960年にはそのわずか1.6%、14万6881人でした)*2。

ヨーロッパで生まれ日本で発展 ピクトグラム

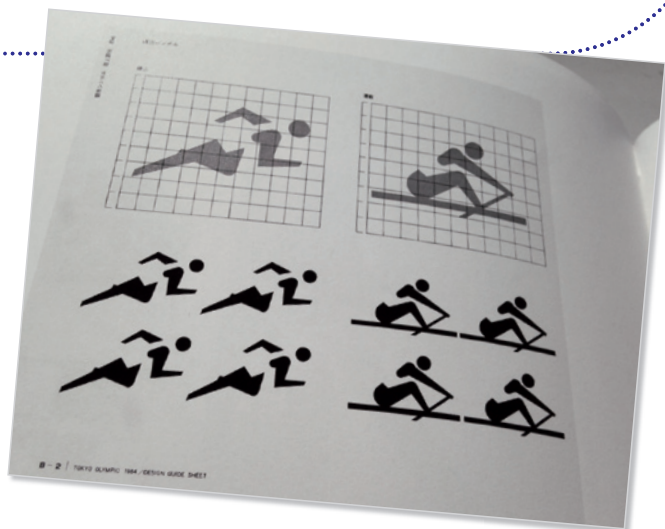


写真1 競技シンボル 陸上競技 漕艇(そうてい)

1964年東京オリンピックで使用された競技種目を表すピクトグラム「競技シンボル」より。このような競技を表すピクトグラムは、それぞれの入場券のデザインなどにも用いられた。(東京国立近代美術館「東京オリンピック1964 デザインプロジェクト」展図録より)*1

そのようななかで、国際的な祭典であるオリンピックの開催が決定し、世界中から大勢の人々が集まることになったのです。戦後の新しい日本を世界にアピールする大きなチャンスであると同時に、文化や風習の異なる人たちをどのようにもてなすか、当時の日本にとっては大きな課題でした。

特に問題となったのが、言葉の壁。当時、日本国内の案内板は「食堂」「お手洗」などといった文字による表示が中心でした。しかしそれでは、90数カ国から来日する外国人選手たちには意味が伝わりませんし、世界中から観戦に来た人たちが会場までどう行けばいいか迷ってしまいます。

若手デザイナーたちの活躍により誕生

そこで当時、重要な役割を果たしたのが、戦



後、美術評論家として活躍していた勝見^{まさる}勝氏（1909～1983年）でした。勝見氏をよく知るデザイナーでピクトグラム^{あひさく}の第一人者でもある村越愛策^{あひさく}さんは、当時のことをこう説明します。

「英語やフランス語、ドイツ語、ロシア語など、各国の文字をすべて表示するのは不可能なので、絵文字を作ろうと提案したのが、東京オリンピックのデザイン専門委員会委員長となった勝見さんでした。彼のもとに若手グラフィックデザイナーが大勢集まり、いくつものピクトグラムを考案しました」

彼らが作ったピクトグラムは「陸上競技」「漕艇」「体操」などの競技種目を表すもの（写真1、2）から、「トイレ」や「公衆電話」など公共施設や設備を表すものまでさまざまでした。特に、オリンピックの競技種目を表すピクトグラムが体系的に作られたのはこのときが世界初で、それらが高い評価を受けたことで、その後のオリンピックでも開催各国がそれぞれにデザインを変化させて受け継ぐこととなったのです。このような歴史から、オリンピックのピクトグラムは「絵文字の国際リレー」とも呼ばれています。

なお、この制作作業を終えた後、デザイナーたちは、勝見氏の呼びかけにより著作権を放棄する旨を書類に署名したといいます。そこには、自分たちがオリンピックに向けて創り上げた成果を、世界の財産として発展させたいという思いがあったとのこと。この時もし、個人個人が著作権料を要求していたら、これら日本発の優れたデザインが世界に受け継がれていくことはなかったかもしれません。



日本独特の文化の1つに

優れたピクトグラムの特徴は「デザインがシンプルなこと」。すぐに記憶から消えてしまう広告などとは異なり、時代を越えて伝わっていく普遍性が必要となってきます。「日本はピク

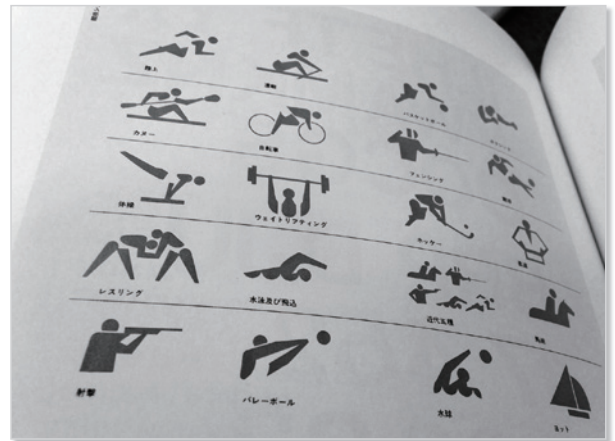


写真2 競技シンボル

1964年東京オリンピックで使用された、競技種目を表すピクトグラム「競技シンボル」のデザイン・ガイド・シート。観客席、手荷物預などの「施設シンボル」とともに、言葉の壁を越えるコミュニケーション・ツールとして、国際大会として初めて全面的に導入された。

（東京国立近代美術館「東京オリンピック1964 デザインプロジェクト」展図録より）*1

トグラムの先進国。その背景には、漢字から“かな文化”を生み出した、日本人独特の感性があります。古くから伝わる家紋も、ピクトグラムのようなものですね（村越さん）

そういえば携帯電話やパソコンのメールでも、「(^o^）」「(T_T)」などのさまざまな顔文字はあっという間に定着しました。海外で使用されている顔文字に比べるとデザインや表情が豊富で、日本人は、気持ちや情報がひと目で伝わる簡素なデザインを作りだしたり、活用したりすることが得意なのかもしれません。こうしてみると、ピクトグラムは、マンガやアニメーションとともに、日本独特の文化の1つともいえそうです。

今回は、色とかたちの関係なども含めて、「視覚言語」についてさらに掘り下げます。

*1 2013年2月13日～5月26日に開催（終了）。

*2 法務省 出入国管理統計統計表

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html

●取材協力●

村越 愛策さん（株式会社アイ・デザイン取締役会長）
公益財団法人 日本オリンピック委員会
東京国立近代美術館
秩父宮記念スポーツ博物館